

## <講演要旨>

### ○三好長慶の生涯

三好長慶は千利休とは同い年で、織田信長より12歳年上です。当時は人生50年なのでかなり先輩ということになります。

三好長慶は阿波で生まれましたが、激動の人生を歩んでいます。長慶が11歳の時に、主君細川晴元に疎まれ、父元長が堺で自害に追い込まれています。敵と戦ったのではなく、本来三好家が忠義を尽くしていた細川家によって殺されるという劇的な状況になりました。長慶は一旦、阿波に帰りますが、謀反の疑いを避けるため畿内に渡海し、細川晴元に服属の意を示します。更に18歳で母親と死別するなど、家族に恵まれず、助けのない中、青年三好長慶は自分に従ってくれる領主たちを従えて、戦国の荒波を生き延びていきます。18歳で、現在の兵庫県西宮市にある越水城主に本拠地を置きます。そして、約10年にわたり虎視眈々と主君晴元の動きを観察し、27歳の時についに独立戦争を引き起こします。父の自害から約15年我慢した忍耐強い武将ですが、晴元に勝利した後、將軍足利義輝は身分が上の者を討った長慶に対して激怒します。ここから、三好 vs 足利・細川という構図ができあがります。義輝は、長慶に対して2回も暗殺未遂を企てますが、失敗。それに対して長慶は逆上することなく、長慶32歳の時に、義輝を京都から追放することに成功します。三好家は京都に進駐し、首都が三好家のものとなります。この時に、現在の大阪府高槻市にある芥川山城に居城を移すのです。5年間は三好家が京都を支配しますが、その後將軍義輝と和睦し、三好・足利同盟が成立します。その後も、大阪の河内、奈良の大和摂津等を制圧して現在の大阪府大東市、四条畷市付近にある飯森城に居城を移します。しかし、領地も次第に拡大していくなか、43歳の時に飯森城でその生涯を閉じます。その2年後、大阪の真観寺で葬儀が行われ、南宗寺で3回忌が行われます。

当時の「天下」とは京都府山城そして奈良大和、摂津・河内・和泉この五カ国を指し、日本で最も重要な地域になっていました。その天下5カ国を抑えた三好長慶は本来、もっと知られていはいはずなのに、なぜそうではないのでしょうか。

長慶が徳島にいたのは少年期青年期の頃で、早い段階で関西に出ていきます。徳島では、徳島城を築いた蜂須賀家がやはり一番知名度が高いです。また、教科書では天下統一は信長・秀吉・家康の時代であり、そこに絡むのは蜂須賀家です。なので、三好は影が薄いのでしょうか。また、徳島は古文書が非常に少ないので、徳島の中世史はなかなか調べるのが難しいのが現状です。

近年、室町時代が再評価され、ブームになっていることは長慶の知名度を上げるチャンスであり、長慶の再評価に繋げていきたいものです。

### ○長慶の評価の変遷

「朝倉宗滴話記」（福井県）のなかで、政治も人材登用も上手な大名の一人として三好長慶が挙げられ、武田信玄や上杉謙信と肩を並べています。

次に武田家の作った史料「甲陽軍鑑」でも、三好長慶が2代にわたり20年間天下を治めたことの功績を讃えています。フロイス書簡や江戸時代につくられた「当代記」でも三好長慶が天下人であると記されており、「戴恩記」のなかでは、敵対していた細川幽斎からも評価をされています。外国の資料「歴史地図帳」は、現在の百科事典にあたりオランダで刊行されていますが、その中の挿図「日本の統治者の変遷」では「MIOXINDONO」という三好長慶を指しているらしき記述

があります。当時は鎖国していましたので、長崎辺りから持ち帰った史料で作ったと思われます。

以上により、やはり江戸時代の中盤くらいまでは三好長慶は天下人の一人として認識されていたことは確実でしょう。

#### ○評価の変わり目

評価が変わったターニングポイントは頼山陽の記した「日本外史」です。これには、長慶の事が「老いて病み恍惚として人を知らず」と書かれています。しかし、どの資料を調べても長慶が病気だという事実はありません。しかし、この本は当時非常に大ヒットしました。例えば、江戸時代において織田信長は、決して見習ってはいけない冷酷無比残酷な人間として認識されていましたが、この本の中で戦国時代という非常時には仕方がないと弁護され織田信長が復活します。この本を幕末の志士が好んで読み、その幕末の志士が明治政府をつくり、教科書をつくりました。その流れが、今も続いているのです。

そして、戦後、司馬遼太郎も「街道をゆく」のなかで、三好長慶は保守的であると著しました。

#### ○長慶兄弟の領国経営

三好氏は巨大な領地を20年余り、どのように支配していたのかを見ていきます。特徴は、一極集中ではなく、三好一族を二つに分けて支配したところです。三好本宗家は、三好長慶の直系であり、四国以外を管轄しました。また長慶は、城下町をあまりつくらず、これも近年評価されなかった理由のひとつに挙げられます。重臣には徳島系列が少なく、外様でも実力があれば、重用しました。

四国側は、阿波三好家により支配します。トップは、三好長慶の実弟、実休。重臣は吉野川流域の家臣で、代々三好家に従っている人がなりました。当時、淡路島の水軍は非常に強力で、そこを支配していた安宅冬康が、三好本宗家と阿波三好家の流通を水軍力で支えていました。実休の次男、十河一存は戦に強く、嫁が先の関白九条家の養女でした。一存の実子義継が長慶の後を継ぎます。

面白いのは、自分の領地約4割を実の弟に譲っていることです。一極集中型ではなく、分散型にしました。同様に、政治の地（飯森）と経済の地（堺）も分けました。世界的にみると現代でも政治・経済の地を分けている国も多く、そうした視点から見ると、決して三好家のやり方は間違っていたわけではありません。また、三好本宗家が織田信長に敗れた後も、阿波三好家が存続したことは、危機管理的にも優れているといえるでしょう。

#### ○長慶の歴史的意義

武田家や毛利家、上杉家と三好家の果たした役割は全く違います。三好家は、2系統に分かれていた細川家を和睦させることによって、50年続いた足利将軍家と細川管領家の分裂を解消しました。

長慶は将軍を京都から近江に追放し、5年間ほど自らが支配します。これは戦国時代において初めての出来事でした。将軍足利家の旗印で戦うのが常識の戦国時代においては、それから脱皮を図るのは当時では常識外の行動でした。また長慶は、京都に入ることなく畿内を支配し、その時々々の政治課題に応じていくつかある居城を移転します。通常の武将はなかなか居城を移さないが、後世に出てくる信長・秀吉・家康の先駆けとなりました。

当時は5年に1回程度、地震や厄災のたびに元号が変わっていました。通常は、天皇と将軍で改元しますが、足利義輝が近江に追放された時に、天皇が一人で「永禄」に改元します。将軍義輝は従わず、逆賊とみなされ、三好家は見事に立ち回り官軍のポジションを得ます。この時、下剋上組の織田家や上杉家は足利将軍の方につき、上洛します。また、「甲子」への改元の際にも、長慶側から改元の申請をして足利義輝のイメージを悪化させることに成功します。

その他にもいろいろな作戦で室町幕府を否定するアピールをしていき、室町幕府が北朝を守って南朝と戦うという大義名分をなくし、幕府の正当性を揺らがせます。葬儀も足利家が保護する五山でやるのが常識でしたが、長慶は大徳寺で葬儀を行い、そこに五山の僧を参列させることで、自分が上位にあることをアピールします。このやり方は、信長や秀吉にも受け継がれていきます。

#### ○おわりに

幕府を倒そうと思ったのは、長慶と信長だけではないでしょうか。他の戦国大名は幕府維持の方向であり、そもそも将軍を倒す形での討幕は日本で初めての常識外の事でした。三好長慶の成功を引き継いでくれたのが織田信長です。ある意味、三好長慶を正当に評価したのが織田信長とあってよいでしょう。

また、長慶が将軍と和睦したことは過小評価されていますが、戦争とは違う形で幕府と戦い、皆の意識が変わることにより足利将軍家が自然と終わることをめざしたのです。